

子宮頸がんワクチン

子宮頸がんの発症が20～30歳の若年層に急増しています。子宮頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)が原因であることが明らかとなりました。その数は100種類以上で、なかでも16型と18型が、がん発症に関係しており20～30歳代では80%に上ります。

HPVは、ほとんどが性交渉で感染します。多くは一過性であり、自然に排除されますが、長期にHPV感染が持続しますと、正常細胞は異型細胞へと変化します。この異形成も自然に治癒することが多いのですが、一部ががんへと進行します。子宮頸がんは細胞検診で、異形成や初期のがんの段階で発見できます。しかし、検診率は極端に低く24%しかありません。

この度、ワクチンで感染を予防する試みが開発されました。現在、接種できるワクチンは16型と18型に

対する2価ワクチンと、尖圭(せんけい)コンジローマの原因となる6型、11型を加えた4価ワクチンの2種類があります。接種時期は性交渉開始前の投与が望ましく、11～14歳が推奨されます。3回の筋肉注射で、2回目が1～2か月後、3回目が6か月後です。副作用としては局所の疼痛(とうつう)、発赤、腫れなどで重篤なものは報告されていません。ワクチン接種後20年間は高い抗体価を維持し、16・18型に限って言えば、ほぼ100%と考えられます。

しかし、ワクチンだけで子宮頸がんを全て予防することは不可能です。したがって、将来は定期的な子宮頸がん検診は必要です。

青葉レディスクリニック
病院長 岡谷裕二

